

『名語記』所収の音象徴語小見

平 弥 悠 紀

一 はじめに

二 一般語と区別の難しい語

鎌倉期の語源辞書『名語記』（經尊者、文永五（一二六八）年初稿本六帖、建治元（一二七五）年増補本十帖完成）には当時の俗語が多量に収められており、音象徴語についても、岡田希雄氏は、「鎌倉期の語源辞書名語記十帖に就いて 上・中・下」（『國語・國文』昭和十（一九三五）年、十一月）の中で、現代語と異なる多くの珍しい用例を紹介しておられる。又、鈴木雅子氏は、音象徴語の類型の歴史的な推移を調べるにあたって、『名語記』の例も考察の対象に加えておられるのであるが、本稿では『名語記』所収の音象徴語について、更に詳しく調査し、『日葡辞書』とも比較してみたいと思う。

『名語記』は色葉分類語源辞書で、第一帖は失われていたものの、第二帖（不完全）には一字名語、第三（不完全）・四・五・六帖（不完全）には二字名語、第七・八帖には三字名語、第九帖には四字名語、第十帖には五字名語を載せ、墨付総数で八百三十三丁にも及んでいる。今回の調査では、田山方南校閲・北野克写『名語記』（昭和五八（一九八三）年、勉誠社）を使用するが、残念なことに昭和二十年の空襲で焼失したため、第七帖（百三十六丁）が欠けているので、七百丁弱になる。第七帖については、岡田氏が前掲の論文の中に引用されたものを使用させていただく。

以下、本稿では、②～⑩は第何帖かを、その下の数字は何丁かを表すことにする。第七帖は、勉誠社発行の『名語記』でのページを

示す。

音象徴語について調べていくとき、いつも問題となることは、一般語と考えるべきか音象徴語と考えるべきか判断の難しい語がいくつか存在することである。現代語でも、「うきうきと、おずおずと、しみじみと……」などは、どこに境界線を引くかで、音象徴語に含めるかどうかが変わってくると思う。以前、「日葡辞書」と「和英語林集成」について調べたとき、認定の基準を示したが、語源にとられすぎて、音象徴語に含めてよいものもいくつかはずしてしまったような気がする。かといって、「と」を伴って用いられ、情態の副詞として機能する疊語形式の語はすべて含めてよいというものでもない。特に、古語については、当時の人々がその語をどうとらえていたか、即ち、音感を重視していたのか意味を重視していたのかを探ることは、非常に難しいと思う。

次に、いくつか問題になるものを挙げてみることにする。

現代語でも、「なみなみ、こなこな……」のように名詞の疊語形式が副詞として機能するが、『名語記』の中にも同様の例がある。

⑤91 問 海_ミスム エヒ如何 答エヒ_ハ海老トカケリ イテハリ_リ

反 エヒハイラ_ハト_トツツノ、アリテ手_テツケ_ケハ出針_ハ反也
 () は筆者による。

⑤96 次 物イフクセ_セトイフトイヘル如何 カスシケ カスハ

ソノ反

⑤84 次 詞_コテメク コテ_ハ如何 コレ_モアマリコトヨキケ
 シキ_キイフ也 カヘツチャコ_コニテヌリツクルヤウ_ニイフ義也

④83 次 スルコト_ニツメ_ハトイヘル詞如何 コノタルミテ_ハ反_ハ
 心同_シ(⑨33参照。)

④3 問 衣裳_ノ中_ニ入ルワタ如何 答 ワタ_ハ綿也……ワタ_ハト_ハアル_ハイヘル也

④4 次 コマカナル物_ノ先_ヲワラ_ハトアル_ハトイヘル ワラ如何
 コレ_ハ薬_ノ様_ニアヒニタレ_ハワラ_ハト云也 又破_キワラ_ハトイヘル義_モアルヘシ ワカテ_ハ反

本書には、むやみやたらに、語源を解釈しようとする特色があり、反切を用いて音を説明している部分でさえ、語源に結び付けようとしており、明らかにこじつけ_トとしか思えないものも多く含まれているので、記述されたものをそのまますぐに信用する訳にはいかないが、「いら(刺)——いらいら」とげがたくさんある様子、「癖——くせくせ」難癖をつけたり、意地悪く言う様、「こて(鏝)——こてこて」壁土を塗るように、濃く厚く塗る様子、「爪——つめつめ」爪先でつねること、「綿——わたわた」綿のように柔らかい様、は妥当だと思える。しかし、「薬——わらわら」はどうであろか。

動詞の疊語形式の語にも、次のようなものがある。

⑨37 次 目_レウル_レ如何 小兒_ノナカム_トスル時_ハ目_ノウル_レ、
ナリ_テ涙_ミウカフ也 有涙_ミ歎_ム歎_ム……

目に涙の浮かんだ状態を「目のうるうる」という言い方をするが、「うるうる」は、意味的には「⑨37 ウルホフ」との関連性が考えられる。擬態語として扱ってよいだろうか。

又、現代語では、「ぬるぬる、ぬめぬめ」は「粘りがあつてかつ滑る状態」、「ねばねば、ねちねち、ねとねと」は「粘り気のある状態」を表す語である。「ぬめぬめ」は「ぬめる(滑)」、「ねばねば」

は「粘る、粘い」との関係が考えられるが、これら一連の語については、語源よりも、むしろ、な行音のもつ粘着性という音感の方が強く感じられるようにも思える。これらの語は、現代語では擬態語として扱ってよいと思う。『名語記』の中にも、「③16 ニタ_レく(潤澤_ヲニタ_トイヘル歎)」、「③19 ニヤ_レく(ネハキ物)」、「③40

ヌ、(ヌ、トスヘル)」、「③44 ヌメ_レく(ヌメル……ヌメハナメラカナリ_トイヘル滑_ノ字_ヨミ_ノハシメ歎)」、「④86 ネチ_レく(ラソクアユム)」、「④47 ネハ_レく(ノリ_ノ様ニネハ_レク_トアル義歎)」という語が見られる。これらも現代語と同様に扱ってよいだろうか。

④48 タホ_レく(タホ_レく タホヤカ_ノタホ如何)、「③20 ニキ_レく(ニキ_レく ニキヤカ_トイヘル……)」、「③8 ニキハフの

ような語については、「タホ_レく」、「ニキ_レく」から「タホヤカ」、「ニキヤカ、ニキハフ」ができたのか、その逆なのか、よくわからない。

②6・④64・⑨51 フラ_レく、「⑨64 ユル_レく」に対して、「④47 フラリ_レく」、「⑧101 ユルリ_レく」のように、「二拍語基+リ」の重複形がある。「ABリ」、「ABリABリ」は、中古から用いられるようになった、擬音語・擬態語のタイプである。このように、形態の変化した「フラリ_レく」、「ユルリ_レく」は、擬態語としてよいだろう。

三 音象徴語一覧表

『名語記』の中でてくる音象徴語をまとめると、次の一覧表のようになる。前節で、問題のある語について述べたが、それらは、表中の用例の欄の下端に示した。

現代語の場合、「子音では、g z d bのような濁音は、鈍いもの、重いもの、大きいもの、汚いものを表し、一方、清音は、鋭いもの、軽いもの、小さいもの、美しいものを表す。コロコロとゴロゴロ、キラキラとギラギラ、サラサラとザラザラの対立などにそれが見られる。」⁽⁵⁾と言われているが、『名語記』にも同様の記述のあることは興味深い。

④ 22 次 車^ラヤルヲトノカラ^クトキコユル カラ如何大キナル物
ノヲトハニ^ココリ^テキコユ チヒサキ物ノヲトハスミ^テキコユ
(~~~~は筆者による。)

山口仲美氏は、中古の象徴詞について、清濁や、撥・促・長音は
ある程度推定できると述べておられるが、個々の語についての詳し
い検討は今後の課題とし、今回は、表記されたままの形によつて分
類する。

又、「サ、」は、
⑥ 26 次 風ノサ、トフク如何 颯^シライフニヤ 音ノサ、トキコユル
也……

⑥ 26 次 水ノナカル、ヲトノサ、如何……
⑧ 90 問 小鳥ノ名ニサ、イ如何……ナクコエノサ、トキコユレハサ、
也……

のように、風の音、水の流れる音、小鳥の鳴く声を表すが、一例と
して挙げてゐる。

2	1	拍
AA	A	形態
8	11	用例数
19	11	用例数
ササ・スス・ツツ・ヌヌ・ノチ	ツ・ハ・フ・ワ	用 例
ノ・ヒヒ・フフ・ワワ	ア・カ・キ・サ・シ・ソ・チ	

3					
ABC	ABB	AAA	AAA	AB	
	4	1	1	53	
	1	3		2	
	5	4	1	55	
カイヤ (ABラ) キハラ・クサラ・ クタラ・コカラ・	(アララ) キララ・シララ (Aロロ) ヒロロ・ホロロ	(AAA) ツツラ (Aロロ)	ハハハ (AAA) ツツラ	カシ・カフ・ガハ・キバ・ギ イ・クサ・クバ・クブ・グツ・ ケイ・コソ・サツ・サハ・シ ト・シハ・シホ・ジカ・スカ・ スツ・チイ・ツハ・テイ・テ ク・トブ・ハア・ハク・ハサ・ ハタ・ヒシ・ヒヤ・フタ・フ ツ・フハ・ミジ・ムカ・ムズ (Aウ) カウ・クウ・コウ・ シウ・チウ・チャウ・ ネウ・ヒウ・フウ・リ ウ・ワウ (AN) チム・ツム・ツム (アラ) サラ・タラ (Aロ) ソロ	スイ? スロ ソソロ シシラ シシラ シシラ ソソロ ソソロ シトト

	4		
	A A A A A		
	A B A B		
			23
			10
			33
		(A B リ)	シトラ
		(A リラ)	クリラ
		(A ロラ)	メロラ
		(A B リ) キイリ・サフリ・ト	ヒソラ・ミツラ
		フリ	
		(A ウリ) シウリ	
		(A ラリ) クラリ・テラ	
		リ・ユラリ	
		(A ルリ) クルリ・スルリ	
		(A レリ) スレリ	
		(A ロリ) キロリ・ヘロリ	ケロリ・メロリ
		(A B ロ) カケロ・コケロ・シ	
		トロ・モトロ	
	(A B ン)		コツム?
			シシシシ?
	アフアフ・ウサウサ・オコオ	イライラ	
	コ・カタカク・カヒカヒ・カフ	エサエサ	
	カフ・カヤカヤ・ガイガイ・キ	カツカツ	
	イキイ・キカキカ・キシキシ・	キハキハ	
	キタキタ・キチキチ・キフキ	キヒキヒ	
	フ・ギタギタ・クイクイ・クサ	キヤキヤ	
	クサ・クシクシ・クユクユ・グ	クセクセ	
	ハグハ・ケイケイ・ケシケシ・	ケサケサ	
	ケホケホ・コカコカ・コクコ	ケソケソ	
	ク・コシコシ・コセコセ・コタ	コテコテ	
	コタ・コチコチ・コフコフ・コ	サイサイ	
	ホコホ・サクサク・サハサハ・	サメサメ	
	サフサフ・サヤサヤ・シクシ	シツシツ	

	111		
	53		
	164		
		(A ウ A ウ)	ク・スハスハ・セイセイ・ソイ
			ソイ・ソフソフ・タフタフ・チ
			タチタ・ツタツタ・ツフツフ・
			ニコニコ・ニタニタ・ニヤニ
			ヤ・ネチネチ・ノエノエ・ヒサ
			ヒサ・ヒシヒシ・ヒタヒタ・ヒ
			チビチ・ヒヨヒヨ・ビクビク・
			フクフク・フサフサ・フタフ
			タ・フチフチ・フツフツ・フハ
			フハ・ヘエヘエ・ホシホシ・ホ
			タホタ・ホヤホヤ・ミサミサ・
			ムクムク・ヤチヤチ・ユクユ
			ク・(ユフユフ?)・ワイワイ・
			ワコワコ・ワシワシ
	(A ウ A ウ)	カウカウ・	シトシト
		キウキウ・コウコ	シホシホ
		ウ・シウシウ・タウ	スカスカ
		タウ・ホウホウ・ミ	スクスク
		ウミウ・リウリウ	ソホソホ
	(A ラ A ラ)	カラカラ・	セカセカ
		ガラガラ・キラキ	タホタホ
		ラ・サラサラ・チラ	タワタワ
		チラ・ツラツラ・ナ	タツタツ
		ラナラ・ハラハラ・	ツマツマ
		フラフラ・メラメラ	ツメツメ
			ニクニク
			ニコニコ
			ヌメヌメ
			ヌメヌメ
			ネハネハ
			ノトノト
			ミソミソ
			ムサムサ
			メケメケ
			モゲモゲ
			モマモマ
			モヤモヤ
			ヤニヤニ
			ヤハヤハ
	(A リ A リ)	キリキリ・	ユサユサ
		クリクリ・コリコ	ユスユス
		リ・チリチリ・ヒリ	ユタユタ
		ヒリ・フリフリ・ブ	ユハユハ

	6	5	
A B C D B C	A B C A B C	A B C D E	A B C B
	11	1	
	11	1	
(A B R D B O)	(A B R A B R) コオリコオリ・ サフリサフリ・ サヤリサヤリ・ シトリシトリ・ スハリスハリ・ ソフリソフリ	(A B R I D E) ヒチリコキ コカヒコカヒ・ヒヨクヒヨク (A B R A B R) ウツラウツラ・ ワクラワクラ	(A ラ C ラ) キロキロ・コロコ ロ・ソロンソ・トロ トロ・ホロホロ・メ ロメロ・ヨロヨロ ツレツレ ノロノロ ヲロヲロ ヒラチラ?
シトロモトロ?		クカナクカナ?	ワタワタ ワチワチ ネラネラ ムラムラ ユラユラ ワラワラ ウルウル エルウル ツレツレ ノロノロ ヲロヲロ ヒラチラ?

	?	他	の	そ
		A B A B + C D C D	A B A B + C D D	A B A B C D + C A B
224				
70				
294				
?	の付いた語は 用例数に含まない。	(A N A n + C ラ C ラ) チンチンカラカラ	(A B A B + C ロ ロ) ケイケイホロロ	(A ラ A ラ C D) (A B A B + C A ラ) カラカラコカラ
		ヘコン〜? ヘソコン〜? マネカサ〜ヒヨロロ?		サラサラリヤ?

四 音象徴語から見た『名語記』の歴史的な位置

音象徴語は時代によって、用いられる形態に違いのあることが、鈴木雅子氏の綿密な調査によって明らかにされている。本稿「三」の表に基づいて、『名語記』に現れる形態と『日葡辞書』（注2参照）を中心にした中世のもの、更に、中古のものとを比較して、考察を加えてみたいと思う。中古と中世の代表的な型については、鈴木氏の論文による。そして、中古については山口仲美氏の調査されたものを、中世のものには『日葡辞書』の型を補った。*は、鈴木氏が論文の中で付されたもので、その時代に見られるようになっ

③ 34 問 モノ、カタハシノチムトハネアカル チム如何 答 チム

ハツリメク ツリミユ等ノ反也

④ 78 次 ツムトタテトラシフル ツム如何 タメツル タツマクモ

反セハツムトナル也

④ 78 次 五節ノ女房ノヘヨツムトヒリタレハトイヘルコトクサアリ

ソノツム如何 チリメル ツルメルヲ反セハツムトナル也

義ヲ音ニアラハス事 例オホキ也

④ 78 次 ツムトコエトイヘル ツム如何 トフメク トフマスノ

反ハツムトナル也 トヒコエトイヘル心ニアタレリ

但し、「む」も大部分の撥音と同じように「ム」と表記されているし、右の例の反切を見ても「ム」ではあるが、語末が「む」になる音象徴語は非常に珍しいこと、又、「日葡辞書」には「+Oindo. (手早くする様)」、「Zundo. (物事をてきばきとする様)」という語があるので、「チン、ツン、ズン」ではないかと考えたのであるが、更に調べる必要がある。

「アンアン」は、

⑩ 33 次 鳥ノ名ニシ、ウカラ如何 コレハカノ鳥ノナク音ノチン〈

カラ〈トキコユルヲシ、ウカラトイヒナセル也 ヲハリノ

重點ヲ略シテ チウ〈カラトハカリイヘルヲシ、ウカラトハ

イヘル也

一例だけであるが、「ン」と表記されている。

「AAA」は中古にも「日葡辞書」にもない型である。

⑦ (1510) 風ノハ、ハトフクトイヘルハ、ハ如何……、火ノハ、ハトモユル

如何、……人ノハ、ハトタル如何

「AAB」は、「ツヅラ」であれば、「ABBラ」の形ということになる。

⑦ (1497) 人ノイフ事ヲキカズシテ、ツ、ラトアリトイヘル如何、コレハ

ツク〈ラカノ反

「ABCBC」は

⑧ 115 問 ミタレタルコトヲシトロトナツク如何……

⑧ 137 次 シトロ モトロイヘル モトロ如何……

「シトロ」と「モトロ」の間にスペースがあるようで、「シトロモトロ」のように、一語として使われていたかどうか疑問である。

五 結び

「名語記」には数多くの音象徴語が載せられているが、形態の面からは、中世のものよりも、むしろ中古のものに近いように見受けられる。中世になって新しく現れるものの形態上の大きな特徴は、二拍語基に撥音や促音の挿入された形であるが、表記されたそのものの形から見る限り、目新しいものはない。促音については、表記

しなかっただけで、実際にはあったのかもしれない。本稿「三」に挙げた用例⑥26「サ、」は「サッサッ」であったかもしれない。「日葡辞書」には「+Sasat. I. Sasattaru」がある。撥音についても、

③27 次 水ニオチイルヲト^トト^トトナル如何
 の「トブ」は「トンプ」のように発音されていたかもしれない。清濁の問題になる語と併せて、今後検討していきたいと思う。

補注

- (1) 「6 擬声語・擬音語・擬態語」(昭和五十九(一九八四)年、明治書院。「研究資料日本文法④修飾句編副詞・連体詞」)。
 (2) 拙稿「日葡辞書」と「和英語林集成」に於ける音象徴語(「同志社国文学」第四十号、平成六(一九九四)年三月)。
 (3) 玉村文郎著『日本語教育指導参考書13 語彙の研究と教育(下)』(昭和六十(一九八五)年、国立国語研究所)。
 (4) 次のような例は、無理に語源を説明しようとしたものだと思われる。
 ⑧90 次 田楽カモチタル サ、ラ如何 筵トモ編木トモカケリ ナル
 ヲト、 サラ<リヤトキコユルカ反リテ サ、ラトナル也
 ⑧144 問 家ノイモノクキヲスイキトナツク如何 答トリワクル時スイ
 トナル故ニ名トセル也 キハカシノ反 ケミノ反 又云 髓筋^{スズネ}、
 音ノスイキン歟 又食テ感歎スル隨喜歟
 (5) 金田一春彦氏「擬音語・擬態語概説」(浅野鶴子編『擬音語・擬態語辞典』、昭和五十三(一九七八)年、角川書店)。

(6) a 「中古象徴詞の語音構造―清濁に問題のある語例を中心に―」

〔國學學〕第九十三集、昭和四十八(一九七三)年。

b 「統中古象徴詞の語音構造―撥音・長音・促音に関する問題をふくむ語を中心に―」(共立女子大学短期大学部(文科)紀要 第十四号、昭和四十八(一九七三)年一月)。

(7) (1)参照。

(8) (6)のaの(表1)による。